

国際哲学コレージュの新旧プログラム・ディレクター、 その聴衆と賛同者への手紙

国民教育省は2009年9月の新学期から公務員の「兼務保証」を撤廃する意向を示している。「兼務保証」とは、中等教育に従事する教員（現在15名）が、非常勤職として、国際哲学コレージュ（CIPh）での研究プログラムを担当することを可能とする制度である。この措置は二つの論理に基づいている。一方で、いわゆる公務員制度の「現代化」法は「兼務保証」を撤廃し、「出向制」に切り替えようとしている（そうなると、非営利団体が公務員の出向分の給与の穴埋めをすることになる）。他方で、国民教育省の「活動領域の再規定」が影響している。国民教育省は高等教育研究省から分離した後、狭義の学校教育に関係のない活動をことごとく放棄しようとしているのだ。

兼務保証を撤廃すれば、幅広い社会参加の機会が奪われ、教育が荒廃することになる。社会に必要な任務（就学困難な児童の支援、スポーツ関係の団体など）を遂行しているあらゆる類の非営利団体からその行動手段が奪われることになるだろう。国際哲学コレージュだけでなく、市民社会全体が危機に曝されるのである。近年、ヨーロッパ各国政府（とりわけイタリアとスペイン）は研究教育の公的制度を解体し続けているが、今回の決定はその一環と言える。国際哲学コレージュに関して言えば、この処置は特殊な次元を含んでいて、つまり、コレージュのアイデンティティが、さらにはその存在が根本的な危機に陥ることになる。つまり、これは哲学研究を窮状に陥れる脅威にほかならないのだ。

そもそも国際哲学コレージュは哲学を根本的に解放するという理念から誕生した。哲学研究は取得学位や履修科目を問わず、あらゆる聴衆に開かれていなければならない、フランス人と外国の研究者が互いに交流しなければならない。哲学研究は諸々の専門科目が交錯する地点に位置づけられなければならない。人文科学、精密科学、文学、芸術は哲学を必要としており、逆に、哲学もまたそれらの学を必要としているのだから。哲学研究は研究教育制度に属する研究者だけでなく、聴衆の関心を引く研究プログラムを提供しうるあらゆる人々によって実施されなければならない。中等教育と研究の連関は、創設以来、国際哲学コレージュのアイデンティティをなしてきた。思い出しておきたいのだが、この着想はGREPH（哲学教育に関する研究グループ）の活動から生まれたものであり、GREPHの発起人たちは高校最終学年だけで実施される哲学教育をさらに拡張しようと望んでいた。哲学教育を拡大するのは、原理的に言えば、研究が教育と深く結びつくことで研究内容が公になることが重要だからである。また、教職に就くすべてのひとに研究の精神がみなぎることは大切だからである。教養や都市における哲学の範囲という考え方は啓蒙主義の遺産なのである。

今日、国際哲学コレージュの活動は、国民教育省と高等教育研究省の分離が象徴する経済合理主義によって脅威に曝されている。経済合理主義を機械的に適用すれば、研究と教育の役割区分が切り離されてしまい、それは国際哲学コレージュが担う哲学の理念とは逆行するものとなるだろう。中等教育の教員は研究する必要などない、というわけである。哲学研究は細分化されたアカデミックな空間のなかに閉じ込められ、公式化され正統化された対象に限定されるのだ（にもかかわらず、領域横断性や学際性は大いに奨励されるのだ！）。国際哲学コレージュが国際的な評価を獲得しているのは、まさに、その研究活動が知の諸領域のあいだをしばしば横断しているからではないだろうか。コレージュが、20世紀後半のフランスにおいて、哲学の創造性を増大させ、その密度を高めたからではないだろうか。コレージュは、フランスにおいて、そして、国際的にみて、哲学の分野で重要な位置を占めており、その独創性は保護されるべき豊饒さを体現している。

国際哲学コレッジが活用してきた「兼務保証」制度を代替案なしに撤廃すれば、その影響は、中等教育に携わる現在のプログラム・ディレクターに及ぶだけではない。この決定はコレッジのアイデンティティと存在そのものを危うくするのだ。コレッジは、これまでその根幹をなしてきた哲学や哲学研究の理念とはかけ離れた、慎ましやかで害のないお飾りの文化団体と化してしまうおそれがある。この事態が明らかにコレッジの将来に関わるものである以上、私たちは今回の処置のことを広く知ってもらうために、あらゆる賛同者に、あらゆる手段を介して訴える（支援メッセージや行動提案はウェブサイトCIPh en Lutteを通じて配信される）。

こうした目的で私たちは、国際哲学コレッジの新旧プログラム・ディレクター、その聴衆と賛同者を招いて、**2009年1月17日土曜日、国際哲学コレッジを支援する討論集会**を開催する。会では、コレッジでの経験を共有することを手始めとして、各人の発言やラウンド・テーブルを通じて、コレッジの多様な使命が検討され、コレッジの企図が現在の状況に照らし合わせて確認され、継続され、刷新される予定である。

（日本語訳：西山雄二）